

見附市教育センターだより



〒954-0052

見附市学校町2-7-9

電話/Fax 0258-62-2343

E-mail mrisen@mitsuke-ngt.ed.jp

令和2年10月23日 NO.7

杉沢の森：10月9日



コロナ禍が過ぎた後も忘れたくないこと

師がく指導者 熊谷 正美

観ると元気が出る芸術作品がある人は幸福だと思う。私にとっての一つは、「みちびきの像(1968・昭43 早川亜美)」である。新潟県民会館の前に建っているこの大きな像は、昭和39年の新潟地震のさなかに教え子を懸命に導いている教師の姿を表している。私は、ここに表現されている、災害に怯える27人の子どもたちとそれに毅然と立ち向かう一人の女性が台上にひしめく群像を見るたびに、この名もなき教師の誠実な自信と誇りに背中を押される思いがしたものである。台座には、地震当時、新潟市教育委員会学校教育課長の碑文が記されている。

新潟地震の魔力は 地上の万物を
うちひしいだかにみえた しかし
幼い生命をあずかる 教師の魂を
うちひしぐことはできなかった
かえって 越佐の教師の なみ
なみならぬ 人間愛と精神力は
この時に示されたのである

新潟県、日本のみならず全世界を巻き込む幾多の災害や社会的な大きな変革が、私たちの目の前に立ちはだかる今、教師として誠実にしかも毅然と立ち向かいたいものだ。

現在、世界中に蔓延する新型コロナウイルスに対して、教育界でも、今までやってきたこと、できたことの多くを中止したり、改変したりせざるをえない状況になっている。今年2020年は、暗黒の一年になるのか、歴史の分岐点になるのか。ピンチをチャンスに変えることはできないだろうか。復旧ではなく復興という視点で。

世界で最も早い時期に新型コロナに関して書かれ発刊されたパオロ・ジェルダナーノのエッセイ『コロナの時代の僕ら』のあとがきに、彼は次のように述べている。

コロナウイルスの「過ぎたあと」、そのうち復興が始まるだろう。だから僕らは、今からもう、よく考えておくべきだ。いったい何に元どおりになってほしくないのかを。

巻頭写真に寄せて ～「杉沢の森、いい所です」～



—「見附第二小学校は、子どもたちも地域もとってもいいのです」—

◇「杉沢の森、いい所です」と言われたのは、今春、他市から見附第二小学校に転入をされたW先生です。6月初め、「師がく」でW先生の学級を訪問したのです。師がくは、「先生方の授業力アップのお手伝いを」と、伺っているのですが、「外部者が参観に来ること」に、戸惑いを持たれる先生は多いです。W先生は、同校が2校目の若い先生です。授業は「思いやりとは何か」を考える道徳で、全員が真剣に考えを出し合った良い授業でした。授業後の話合いで、W先生にも緊張が感じられました。私は「子どもたちがよく考え、いい学びをしていましたね。」と感想を述べ、「どうですか、校区は歩かれましたか？」と尋ねました。すると、ニコッとされ、上述のように言われ、続いて「とっても素晴らしい所なので(私にも)、ぜひ行ってくださいね。」と言われました。次回の訪問までに、「杉沢の森に行く」と約束をしたのですが…。今年は「熊の出没」が各地で起こり、杉沢近くの長岡市栃尾地区でも「人が熊に襲われる事件」もあり、行けずにいました。ですが、W先生の2回目の師がくが迫り、「杉沢の森を訪ねる」というW先生との約束を果たさねばと、9日(金)の夕方4時半を回ってから、杉沢の森に行き、管理棟近くの林を撮ったのが表紙写真です。薄暗くなった中を写したのです。この時は夢中で、熊のことを忘れていました。どんよりした雰囲気のものしか取れなかったのですが、W先生の師がく訪問の後、明るい時間にもう一度、杉沢の森に行き、驚きました。あちこちに「熊注意」の看板が立っています。一人では危険です。熊の安全が確認させてから、ゆっくり行こうと思います。

コラム ・・哲学の道 S22版 学習指導要領一般編(試案) 見附の教育・・

◇秋の紅葉シーズンを迎え、「Go To トラベル」と言われても、コロナ禍で例年のように旅行に出かけるわけにはいきません。私は京都へ数回しか行ったことはないですが、銀閣寺近くの「哲学の道」は、穏やかな気持ちで散策した思い出の場所です。この哲学の道は、京都大学の先生をしていた哲学者の西田幾多郎が思索しながら散歩をしたことから、その名がついたと言われています。今年が西田幾多郎の生誕150年で、教鞭を取った京都大学やふるさとの石川県などで様々なイベントが行われています。西田幾多郎と言えば、著書『善の研究』が有名ですが、私には内容は理解できません。ただ冒頭の「経験するというのは事実其儘(そのまま)に知るの意である。」は、「まずはただ経験をやる。そんな『経験』こそが、哲学の始まる根柢(こんてい)なのだ。」ということは、理解できます。前号で戦後、新しい教育制度の中で出された学習指導要領一般編(試案)に新教科『職業』が盛り込まれたことを述べました。◇この時、『社会科』も誕生しました。この社会科を作ったのが、当時の文部省に勤めていた上田薫です。上田薫は、文部省の後、名古屋大学や東京教育大学、立教大学、都留文科大学に勤められ、戦後70年、社会科教育の中心的な存在の人でした。この先生が、アメリカの教育学者のジョン・デューイの提唱した経験主義を新しい日本の教育に持ち込み、社会科という教科を作ったのです。実は、上田薫は西田幾多郎の孫で、上田薫は昭和17年に京都大学に入学し、哲学を学んでいます。幾多郎が京都大学を既に、退官していたとはいえ、「経験こそが…」という祖父：西田幾多郎の影響を受けていたと思われれます。◇さて、それまで「国史や地理」であった教科が「社会科」になり、当時の先生方は、新教科「社会科」を、「どのように行えばよいか」勉強する研究会が、日本各地で立ち上がり、様々なプラン(指導計画)が発表をされましたが、そのほとんどが大学の附属小学校においてのものでした。その中で、見附小学校が、昭和22年9月の「社会科作業単元表」の発表から、「見附プラン」と呼ばれる単元計画を次々と作成し、研究発表会を行って世に問いました。特に、「コア・カリキュラム」と呼ばれる「子どもたちの生活上の問題を解決するための学習を中核とした教育課程」は有名です。記録やその当時に勤められた先生から話を聞いたことがあります。見附小学校のみでなく、見附の先生方が「見附の子どもたちのために」と、みな一生懸命に学び合ったとのこと。今、見附市に勤める先生方に、先人たちの思いが受け継がれ、どこの学校に伺っても、子どもたちが学びを楽しみ、生き生きと輝いています。(こ)

4時から夢塾 「考え、議論する道徳授業」～一人一人の価値観を育む授業へ～

第10回「4時から夢塾」を9月30日(水)、長岡市立千手小学校校長の捧信之先生から、昨年に引き続き『道徳の授業改善』について指導を頂いた。「道徳の授業を何とかしたい」と、熱い思いで臨んだ受講者が多かった。受講後のアンケートに、若い受講者は「自分の道徳性の乏しさを感じた。もっと研修を積んで、子どもの心に残る道徳授業を目指したい。」と書いていた。簡単に講座内容を記す。



- 1 「考え、議論する道徳授業」とは…「価値を教える」から「一人一人の価値観を育む」ことである。
 - ・実践例『蝶の命蜘蛛の命』…蜘蛛の立場や気持ちになって考えてみよう。役割演技で「ぼくはこの後どうすればよいのだろう」の学習問題→話し合い活動「最終的な自分の考え」→心の成長作文(振り返り)
 - ・「教科書使用」…日常的に使うのはよいが、いつも同じパターンになる。年に一・二回は自作教材を。
 - 2 道徳的価値の三つの理解…価値理解・人間理解(分かっているても出来ないんだよなあ…)
 - ・他者理解
 - 3 道徳性を養う…道徳性は目標で、①道徳的な判断力②道徳的心情③道徳的実践意欲と態度を養うこと。
 - 4 主体的・対話的で深い学び…子どもの問題意識を動かす授業を→子どもと教師が学習問題を生み出す。
 - ・学習問題 ◎とは、子どもの問題意識→◎とは、子どもの思いを大切にす象徴である。
 - ・実践例『手品師』二つの意見の授業…判断の根拠となる資料提示→意見交換→最終判断・理由付け
 - 6 道徳科の評価…学習状況や、道徳性に係わる成長の評価をすること。道徳性が養われたか否かは容易に判断はできない。「～な心情が育った 態度が育った～な価値が理解できた」等は、言えないこと。
 - ・評価とは、子ども理解を深める営みであり、認め、励ます個人内評価をすること。
 - 7 主体的・対話的で深い学びを具現する最も基板となるもの
 - ・教師と子ども、子どもと子ども同士の信頼関係であり、温かいまなざしの中で授業が深みを増す。
 - 8 豊かで多様な学びに向けて…道徳科は価値ある心の体験をする時間
 - ・道徳科は自己の内面を見つめ、迷い悩む時間→漢方薬のように、じわじわきいてくる風土をつくる。
 - 9 まとめ…子ども自身が道徳の授業って面白いと思うからこそ、価値観は育まれる。
 - ・考え、議論する道徳への質的転換を図ることは、「思慮深い人間の育成」をめざすものである。
- <参加者の声>** ・“子どもの姿から見とる”ということが、どんなことにおいても大事であると改めて感じた。日常の姿から、その子の思案している行為一つにも大きな心の動きが見られる。その思いを汲み取り大切にす授業であったり、人間として、担任であったりしていきたいと考えさせられた。
- ・授業の作り方にいつも苦戦している。どうやったら子どもたちが議論でき参加できるのか…今回のお話で、進め方や根本的な授業の考え方をたくさんアイデアとして頂いた。明日からぜひ活用したい。
 - ・子どもが学習課題を自分事と捉え、考えを深めていく道徳は難しいと感じている。参考になった。
 - ・道徳は、子ども自身が自分の内面を見つめて、迷ったり悩んだりする貴重な時間だと感じた。また、他の子どもの意見を聞き、新たな視点を入れる良い機会だとも思った。今後の授業づくりに生かしていきたい。
 - ・価値観を押し付けることなく、問題意識を明確にし、解決するのかを考えさせることが大切だと分かった。
 - ・これまでは振り返りだけで評価をしようとしていた。じっくり考えて一行書く子どもの考える姿や、皆の前で発表しない子どものつぶやきなど、子どもたちの頑張っている姿に、もっと目を向けたいと思った。
 - ・評価をどうしていくかに、考えあぐねていたのので、「評価に落とし込む授業ではない」の一言に救われ、資料を熟読する中で、考え議論する道徳授業のあり方を整理して、実践につなげたいと思った。
 - ・講師先生の熱意に応える上でも…、もう少し長目の時間設定、シリーズ化なども検討して頂きたい。



4時から夢塾 「外国語科の授業づくりのヒント」

第14回「4時から夢塾」(示範授業)を10月8日(木)、新潟大学附属長岡小学校の山口和之先生から、見附小の6年：外国語の授業で、指導を頂いた。

1 単元名「スペシャルな休日を紹介するよ」 〈授業の流れ〉

- ◎ I watched～. / I bought～. の表現を使って、自分の休日を紹介しよう。
- ・T1 自己紹介で、聞こえてきた順番にカードを並べましょう。どんな英語が聞こえましたか。
- ・T2 I watched～. / I bought～. の表現の練習をしよう。
- ・T3 今までに習った表現を用いて、自分の休日を友達に紹介しよう。



2 ミニ講座 「外国語科の授業づくりのヒント」

(1) 外国語を介して、『コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力』を育成する外国語科

- ・決められたフレーズは言えるが、自分の本当の気持ちが言えない。ゲームでは楽しく活動できても、自己表現ができない。そこに、子どもの願いや思いは本当にあるのか。

(2) 外国語科における資質・能力を育む授業とは？

- ・『選択』＝『自己決定(自己表現)』がある授業⇒「自分はどんなことが伝えたいのだ」をもつ。

(3) 単なる「外国語への慣れ親しみ」からの脱却⇒「目的意識」「相手意識」をもった外国語の学びへ

- ・何を目的に、この英語表現を学ぶのか。どんな状況・場面で、学んだ英語表現を使用するのか。
- ・子どもの願いや思いが中心にある授業づくり(みんなは、最後にどんなことをしていきたいの?)

(4) 外国語科特有の知識・技能の定着

- ・Output(思考・判断・表現)のために、必ずInput(知識・技能)が必要。・Inputの量と質が、Outputを下支えする。外国語科におけるOutputは、他教科領域に比べ、一見して幼稚に見えてしまう。

(5) バックワードデザインによる単元構成の工夫

- ・子どもたちにとって魅力的な最終タスクを設定する。二回に一回はスモールトークを入れる。

(6) 学習評価・「記録に残す評価」は毎時間行うわけではない。記録に残すのは単元の終わりにする。

(7) 資質・能力を育む授業づくりのために(まとめとして)

- ・子どもの願いや思いを実現する単元構成をする。
- ・相手意識や目的意識をもてる最終タスクの設定をする。
- ・既有表現と新出表現を、常に授業の中で提示していく。
- ・自己決定(自己表現)の場を設定する。



<参加者の声>

- ・細かなテクニックや子どもとの向き合い方、授業づくりについて学んだ。選択や自己表現の大切さ、やり方について学んだので早速、取り組みたい。
- ・単元のゴールを設定し、目的意識を持って学びを習得することの大切さを学んだ。
- ・英語を楽しく学んだり、使ったりする本物の授業を見て、より理解が深まった。
- ・少しずつ話せるようになるための話し方や掲示物画面の提示の仕方が、勉強になった。
- ・身近な手作り教材が、「話したい」や「自分も話せるかも」の気持ちを持たせられることが分かった。
- ・授業の流れや様々なアクティビティの盛り込み方、単語の発音のさせ方、学びの多い45分だった。
- ・単元の最後のゴールからワードを持ってくる単元構成の大切さが分かり、今後の授業に生かしたい。



10月

科学教育部



《今日の1枚》

秋晴れ～いわし雲(巻積雲)～

【夏休み作品展ありがとうございました！】

短い夏休みだったにもかかわらず、力作揃いでした。かなりの時間を費やしたのではないかとと思われる模型や、植物や動物の観察記録といった継続的な根気のいる観察を行ったものなどが見られました。草木染めの作品もあり、自分でアサガオを育てるところから、アサガオの色素で染めるといった「生物」分野、「化学」分野といった理科の幅広い力を活用した作品もありました。これから日常生活の中で、さまざまな科学に触れる機会があるかと思えます。ぜひ興味をもったことを積極的に調べたり、観察したりしてほしいと思います。



標本やインテリアなど、工夫やアイデアあふれる作品がたくさんありました！

【科学研究発表会～無事に開催できたことに感謝です～】

コロナ禍の中、科学研究発表会を行うことができたことに感謝申し上げます。先生方の指導と、児童・生徒の科学への探究心の高まりによるものだと感じています。

特に、生活の中から出てきた疑問や不思議について自分なりの考えをもち、追求していた作品が多く、科学と生活の関連について改めて考える機会となりました。

当日は、広い会場を利用したこともあり、保護者の方からも参観していただくことができ、多くの方々から、お越しいただくことができました。また、児童・生徒の発表準備が良くされており、例年よりも質問が多く挙がっていました。新型コロナウイルス対策を行いながらも、今年度も開催できたことが非常に有意義なものとなりました。



発表では高学年になるにつれ、聴き手を考えて工夫した発表がなされました！

科学の公園

小学校では、今年度から新しい学習指導要領が実施されており、中学校では来年度から実施されます。「主体的・対話的で深い学び」の授業改善を目指していくことが大切になります。単元により、目指す授業の形が変わることもあると思います。最近では、授業で学習したことを活用し、解決できる課題を生徒に与え、解決を目指す授業を実施しています。もちろん、教えるべきところは教えます。その上で、生徒に任せるべきところを任せるように授業を行います。生徒が試行錯誤を繰り返しながらも、「やってみてほしい！」そんな声があがる授業を目指しています。今回は、授業の一コマを紹介します。

授業の1コマ～液体の正体を鑑定しよう～

単元は中学1年「身のまわりの物質」です。この単元は、身近な物質を分類したり、特徴を調べたりする単元です。この単元では、日常生活と関連付けながら、不思議な現象や科学のおもしろさに触れていくことが大切です。そして単元の最後に、学習したことを活用して解決ができる課題を与えました。課題は四つの透明な液体（①海水 ②焼酎 ③炭酸水 ④サントリーダカラ）の正体を調べ、鑑定書を作成することです。においてある程度の正体はわかりますが、「見た目」から明らかな証拠を写真で撮影し、他の人へ液体の正体を説明した鑑定書を提出することが目的です。さて、生徒たちはどのようにして証拠を探していくのでしょうか。

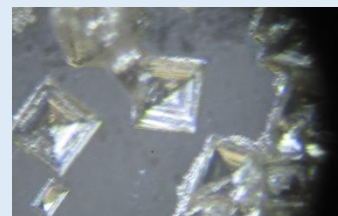


においや音を手掛かりにして、四つの液体について正体を予想します。「『プシュッ』と音が聞こえたから炭酸水だ！」「においからアルコールが入っているかな。」焼酎と予想したものについて実験を行おうとします。「アルコールだから燃えるはずだ！机の上で燃やして良いですか？」生徒はカメラを構えながら、燃える様子を撮影しようとしています。しかし、火を近づけても燃えません。「なんで燃えないのだろう？アルコールのにおいがしたのに・・・」相談が始まります。「濃度が薄いんじゃない？どうしたら濃度が濃くなるのかな。『蒸留』すればいいんじゃない？」授業で学習した濃度や、蒸留の実験を思い出して実験します。今度は、蒸留をして集まった液体に火がつくと・・・「やったあ！今度は火がついた！写真写真！」達成感がある表情をしていました。



蒸留したアルコールが燃えた証拠写真

海水の場合は「水を蒸発させれば食塩が残るはずだ！」蒸発皿に入れて加熱して、白い粉が残ります。これを証拠に実験を終わる班もいる中・・・「これだと食塩っていえる？再結晶なんだから、顕微鏡で見てみよう！」明らかな証拠を、さらに追求する班もあります。



食塩が含まれている証拠写真

こういった授業を行うと、いつも生徒のエネルギーに驚かされます。誰もが科学に興味があり、疑問や正体を追求し始めます。理科の中にも様々な分野があるので、すべての生徒が理科を得意というわけにはいかないかもしれません。それでも、日常生活に関わることで、自分なりに解決できそうなことには目を輝かせて取り組みます。

ぜひ日常に潜む科学から、生徒のわくわくした姿を引き出してあげたいものです。